

***** フィールドノート（特集：日系ブラジル人）*****

2008年ブラジル紀行——私の中の静かな“ブラジル・ブーム”

愛知県立大学日本文化学部准教授
川畑博昭

2008年はブラジルへの日本人移民100周年にあたり、ブラジルはもとより日本の各地でも様々な祝賀行事が催された。同時に、しかし、この2008年は移民100周年の陰に隠れながら、これとはまったく違う次元で、自分の中でもう一つの静かな“ブラジル・ブーム”が沸き起こっていた。同じ南米でも隣国ペルーを主とするスペイン語圏を研究対象とする私が、自分の研究で本格的にブラジルについて触れたことはわずか一度に過ぎない。ブラジルへの渡航経験は十数回あるし、それなりにポルトガル語も解すし、私の専門である憲法学に関するブラジルの研究書もそれなりに読んできたし、ブラジル出身の多くの友人にも恵まれているにもかかわらず、である。

もともと私は、愛知県立大学でスペイン語とスペイン語圏諸国について学び、その後中南米の憲法を研究する道に入った後も、スペインとポルトガル、そしてその植民地である中南米のスペイン語圏とブラジルに非常に強い関心を持ち続けてきた（学部生時代にスペインへ行った際には、同じ期間ポルトガルにも滞在した）。イベリア半島諸国と中南米諸国が「遭遇」した「地理上の発見」という歴史的事実、そしてこの「旧大陸」と「新大陸」の遭遇の100年後には、日本は鹿児島県の種子島という自国の地で最初の西洋人たるポルトガル人に「遭遇」

する。さらにその約350年後には、今度は日本も「移民」というかたちで「新大陸」と「遭遇」する。遭遇の連鎖から成るこの〈旧大陸—日本—新大陸〉の循環構図を、現時点から自分の関心と無理矢理こじつければ、鹿児島で生まれ育った私が長い間中南米で過した、という過去の事実には、私とポルトガル・ブラジルには何らかの因縁があったのだ、と詭弁を弄したくもなる。南米ペルーやスペイン語圏諸国を研究の中心にしてきたことから、私の〈ポルトガル—日本—ブラジル〉への関心は本格的な研究として展開することはないまま今日に至るが、実は常に「もう一つの関心領域」として存在し続けてきたと感じる。例えていうなら、私にとって、生業とする比較憲法研究の対象地域としてのスペイン語圏への関心が「主旋律」だったとすれば、ポルトガル語圏へのそれは「副旋律」ということになるだろうか。

さて2008年11月の10日間、南米とは「ほとんど何の関係もない」と言いつつも含蓄のある仕方でご自分の研究領域と南米との接点を探る同僚の上川通夫先生とブラジルおよびペルーを訪問した（私はその後、さらに1週間自分の研究のためにペルーに滞在した）。今回の渡航目的は、ブラジルのサンパウロ大学およびペルーのカトリカ大

学と愛知県立大学との学術文化交流協定締結のための情報交換と現地の日系社会の視察である。私自身は、南米渡航という突然の誘いに戸惑いながらも興味を示してくれた、かねてから敬愛する日本中世史研究者との旅を心から楽しみにしていた。南米の風景を見慣れた私にとって、私とはまったくタイプの違う、しかも「南米御初」の同僚先生からは、きっと私の「死角」を突く感想を色々教えてもらえるだろうという大きな期待をしていたからである。これを再び無理矢理こじつけて言えば、上記の私の関心の「副旋律」を成すブラジルを、日系社会といういわば「日本」の部分から捉え返すヒントが得られるのではないかという姑息な狙いである（この点については、本誌掲載の上川先生の文章を参照していただきたい）。

端的にいえば、私の中途半端な、さりとてスパッと切れないブラジルとの関わり方は、上記のような事情によるものである。研究として本格的に展開はできなくとも、私としては、いつもとは「趣の異なる」一般のブラジル渡航で感じたあれこれを綴っておくことには、改めて私の中の「副旋律」を真正面から問う多少の意味はあるのではないかと考えた。こうして今回は、慣れ親しんだペルーからは離れて、これまた無理矢理こじつけつつ、私の“ブラジル・ブーム”の中心を担ったブラジル紀行から、私なりのブラジルという国と社会について記してみたい。

* * * * *

実は、私の静かな“ブラジル・ブーム”

には、2008年4月から1年間、愛知県の県費留学生としてブラジルから来日し、私が所属する日本文化学科に研究生として在籍しているシンチア・ハルミ・矢馳（Cinthya Harumi Yabasse）さんの存在も大きい（本誌掲載の彼女の文章も参照していただきたい）。自分の出自に関する日系移民史を日本史との関わりで学びたいと来日した彼女は、既にブラジルの名門サンパウロ大学哲学文学部人間科学部の卒業生である（サンパウロ大学は全11学部で在学生約80,000人、このうち哲学文学人間科学部は約12,000人というマンモス校である）。こうした縁もあり、今回の渡航に際しては彼女が両大学の橋渡し役として大いに尽力してくれたおかげで、現地のサンパウロ大学日本文化研究所長や同学部の教員とのコンタクトを取ることができたのだった。

我々の宿泊先はサンパウロ市内の日系人街リベルダデ（Liberdade）にあるホテルであったが、協定締結のための協議が予定されていたサンパウロ大学哲学文学人間科学部のキャンパスまでは、そこからタクシーで40分ほどのところにあるはず…であった。というのは、私自身はそれまで同じサンパウロ大学でも宿泊先ホテルからすぐ近くにある同大学法学部キャンパスにしか行ったことがなく、今回のキャンパスまでの正確な距離も所要時間も把握していなかったからである。これに加えて、最近タクシーを始めたばかりという運転手の兄ちゃんには、ブラジル人に言わせれば「間違いようがないほどわかりやすい」はずの場所にあるサンパウロ大学までの道のりを、ものの見事に間違え（!）、我々は約束の時間に1

時間以上も遅れて到着した。期せずして、のっけから「ラテン時間」の実践である。

それでもサンパウロ大学のスタッフの方々は快く笑顔で迎えて下さった。今回の渡航に際しやり取りをさせていただいていた哲学文学人間科学部・日本文化研究所長 Junko Ota (織田順子) 先生の案内に従い、同大学国際協力局文学部事務局職員で協定担当の Rosângela Duarte (ロザンジェラ・ドゥアルテ) さんを交えて協議を行った。さすがはサンパウロ大学、国際交流に関して豊富な経験と蓄積を持っているだけあって、既に国際学術協定書の雛形は用意されており、交換留学生の支援体制も整っている。他方こちらは、留学生支援体制も不十分なまま、来年度からの学部学科再編を迎えようとしている。そうした大学間の支援体制に加え、協定締結をより現実化するための奨学金制度の完備等、解消すべき問題は残されているものの、協定締結後には形骸化してしまうような「ありふれた協定」ではなく、関係者にとって真に有益で実のある協定にすべく、今後の情報提供と意見交換の継続を確認した。これはこれとして、ここで特筆しておきたいことは、サンパウロ大学が提示してきた協定書雛型の中の学術文化交流協定の対象についてである。学部・大学院を問わず学生および教員研究者はいうまでもないが、そこではさらに事務職員までが交換交流の対象に含まれていた。本来、学生であれ研究者であれ、人的交流を下支えしているのは、地道でありながらもっとも枢要な事務体制であり、両大学間での交流支援体制を学び摂取し合うこととの意義は自明であるはずなのに、我々はこうした側面を「当たり前なこと」として、

あるいは「教育研究本位」の発想で忘れがちである。それゆえ、当該の物事に関わっている (envolvido=ポルトガル語で「包み込まれている」の意) あらゆる立場の人々を巻き込んでこそ真の「文化交流」が構築されると見定めるサンパウロ大学の姿勢に度肝を抜かれた。我々にはとても斬新な発想に思われたが、これも、多人種から構成される社会の文化的共生を築き上げてきたブラジルのスケールの大ききゆえであろうと、私は勝手に得心したのである。



サンパウロ大学での協議(真正面が Ota 先生、右手前が Duarte さん、左手前は筆者)

終始そんなことを感じながら、サンパウロ大学のスタッフと十分な意見交換をした後に、我々が取りかかったのが、今般のもう一つの渡航目的である日系人社会の視察である。

* * * * *

南米ペルーに日系人の身内を持つ私にとって、日系社会そのものは珍しいものではない。しかしブラジルの日系社会は世界一というその規模ゆえに、サンパウロ市街の一角に日系人街である「リベルダデ地区」を確立しており、また十分にその街を見て歩いたことのない私にとって、この地区を

闊歩して知ることは私の興味を大いに引き立てるものであった。なるほど「日系人街」といわれるだけあって、この地区の通りは鳥居や提灯で彩られ寺院も建立され、おそらくもはや日本では「古くさい日本らしさ」と思われるようなものが所々で強調されている。ここでブラジルにおける日本文化の紹介、日系人社会における日本文化の保存維持、日本語学習の推進等の文化的役割の中心にあるのが、日本ブラジル文化福祉協会（通称「文協（“Bunkyo”）」である。ちょうど移民 100 周年を記念して、「文協」の建物の中にある移民史料館では、移民開始当時から保存されてきた実に貴重な資料と史料が、日本からの移民と現地での日系人社会の 100 年間の辛苦に満ちた歩みを生々しく物語っていた。



日本ブラジル文化協会（「文協」“Bunkyo”）

リベルダデ地区には日本のものを扱う店が所狭しと並び、日本語での看板も数多く見られ日本語もよく耳にする。しかし私の注意を引いたのはそういうことではない。多くの日系商店街の中で、何の違和感もなく中華料理店やブラジル料理店も存在し、人々も日系の別なく入り乱れている。一見瑣末なことのように思われるこの風景は、しかし、南米各地の「日系」というものがそれほど容易く「現地」と混ざり合わない

歴史を余儀なくされてきただけに、これまたとても斬新に思われた。「日系」であることが、「日系」を掲げていることが、否むしろ、そうであり続けることによって「ブラジルの一部」として存在していることに、改めて私の関心は釘付けになった。

そのことについて私なりに納得のいく理解ができたのは、現地の日系人団体の人々と会ってからである。この点でも、私の“ブラジル・ブーム”の火付け役のシンチアさんが奮闘し、彼女の派遣先である現地の愛知県人会の幹部の方々との交流をセッティングしてくれていた。彼らは、ブラジルへの日本人移民がとりわけ戦前戦中に想像を絶する苦勞のなかで、いかにしてブラジル社会との「融合」を果たし、今日のように敬意を払われる地位を獲得してきたのか、ということ懇々と語ってくれた。「日本人的特徴」と言われても私にはその当否を判断する能力はないが、彼ら曰く、ブラジルへ渡った日本たち人は特に子弟の教育に力を入れ、戦後日本人の子である「二世」が成人する時期になると、高等教育への進学率は急増し、非日系のブラジル人に「大学へ入学したいのなら、日系人を一人殺すしかない」というブラックユーモアを吐かせるほどであった（これは、ブラジル在住の非日系である私のブラジル人の友人たちもしばしば口にする）。そしてそうすることでブラジル社会への進出を果たし、政・財・官で活躍する多くの人材を輩出し、その実直さとともに、ブラジル社会での尊敬を勝ち得てきたと凛として語っていた。規模の大小を問わず中南米各国には日系社会が存在するが、スペイン語圏の国では大体どこでも、東洋人を見かけると「チノ（chino＝

スペイン語で中国人の意)」と呼びかけられるのは良く知られた話である。しかしブラジルでは「シネス (chinês=ポルトガル語で中国人の意)ではなく「ジャポネス (japonês)」と言われる。「チノ」と呼ばれてきた経験が長い私には、こうしたところに、ブラジル日系人社会の「現在 (いま)」があるように感じられるのである。ここで忘れてならないのは、ブラジル日系人社会のこうした「現在」は、日系人社会の側からのブラジルの現地社会への「歩み寄り」と同時に、それを受け止めるブラジル社会の側の「寛容さ」があったという点である。これまた独自の多文化共生社会を生み出してきたブラジルのなせる業なのであろう。



日系人街リベルダデ地区

* * * * *

ところで、ほとんどがスペイン語圏の隣国とともにブラジルは、「中南米」や「ラテンアメリカ」と一括して捉えられるのが一般的だし、私も必要に応じてそのようにしてきた。こうした一般化は、この地域の特徴を大づかみで理解するには重要かつ有効でもある。この点は留保しつつも、事柄の仔細に目を凝らせば、ブラジルは他のスペイン語圏の中南米の国々とは「似て非なる国」であり、ブラジルという国を正確に把握するためには、外観の類似性の内にある異質性にこそ注意が払われるべきだろう。ポルトガル語にしても、確かに姉妹語ゆえに、スペイン語との類似性にこそ目が向けられはするが、その違いについて云々されることは少ない(同じ単語が異なる意味を持つという例は枚挙に暇がない)。歴史や国家形態という面から見れば、独立時期は同じでも、旧スペイン系植民地諸国がいっせいに独立と同時に共和制を採用することでスペイン王室との紐帯を断ち切ろうとしたのに対して、ブラジルはナポレオンのイベリア半島侵攻からブラジルへ逃れてきていたポルトガル王室の子孫の下に帝政を敷きつつ独立し、67年間を経てようやく共和制へと移行する。私の専門領域から、中南米諸国の独立史の文脈の中に位置づけて見れば、建国時におけるこの国家形態の選択における違いは、その後の憲法政治史の展開からして、「結果的には同じなのだ」というだけの意味では済まない。急激な歴史の断絶ではなく、いわばソフトランディング的な建国のありようである。人種という側面から社会構成を眺めれば、19世紀後半まで

奴隷制を維持すると同時に、他国とは比較にならない規模の移民を受け入れてきた「ブラジル的人種の坩堝」はスペイン語圏諸国の比ではない正真正銘の「移民国」である（余談ながら、ブラジルへの第一回日本人移民を乗せた笠戸丸がサントス港へ入港した6月18日は、サンパウロ州で「日系人移民記念日」と定められている）。今回のブラジルへの渡航で私が感じたブラジルの「寛大さ」は、ポルトガルの入植以来止むことなく繰り広げられてきた「異文化交渉の場」として、ブラジルの歴史と社会の中で作り上げられてきた共生の文化であり風土なのだということである。

* * * * *

本稿の冒頭で、2008年が私の中での“ブラジル・ブーム”であると述べたが、こうして見ると、力点の置きどころは“ブーム”というよりは、むしろそれが「静かな」存在としてあり続けた点にあることを改めて自覚する。つまり私の中のブラジルへの関心は2008年に突発的に生じたものではなく、私が自分の研究における「主旋律」を設定したその時から、さらに言えば、スペイン語圏諸国への関心を抱き始めたその瞬間から、「もう一つの旋律」として「主旋律」を何がしかの方法で規定してきたといえる。私にとって旋律の「主-副」関係は今後も変わらないままであり続けるだろうが、そうである限り、私のブラジルへの関心は決して止むことはない。帰国して、再認識したことだった。



ブラジル独立記念（イピランガ）博物館（右が上川通夫先生、左が筆者）